

2018年度は惑星直列の年？

霞ヶ浦医療センター
臨床検査技師長
国仲 伸男

天体ファンには申し訳ありませんが、残念ながら天体のお話ではありません。

昨年10月5日、日本医師会の社会保険指導者講習会で厚生労働省保険局医療課長の迫井正深氏が「2018年度診療報酬改定に向けて」をテーマに講演時に述べられています。すなわち、2018年度には、診療報酬と介護報酬の改定だけでなく、第7次医療計画と第7期介護保険事業計画なども同時にスタートすることを「惑星直列」に例えています。さらに、迫井氏は「さまざまな施策がシンクロし、大きな改革が進む」と述べ、改革の前提となる「医療を取り巻く状況・課題」の3つ（①日本型少子高齢化社会の到来、②ケアニーズの変化と多様性、③技術革新と保険制度の調和）を挙げ理解と改革への対応を求めています。課題③での技術革新は、「情報通信技術（Information and Communication Technology: ICT）、ビッグデータ、人工知能（Artificial Intelligence: AI）で生産性向上をすすめる」といったもので、これには遠隔診療の推進も含まれています。

医療において、ICTとAIは目覚ましい発展を遂げており、一昨年12月の未来投資会議・構造改革徹底推進会合では、「遠隔診療のエビデンスを収集したうえで2018年度改定での対応を検討していく」「AIを用いた診療支援技術を確立し2020年度までの実装を目指し2018年度改定でエビデンスをもとにインセンティブ付けの検討を行う」と明言されていることから、ますます本格的になっていくものと推測されます。さらに、日本病理学会では「AI等の利活用を見据えた病理組織デジタル画像（Whole Slide Images: WSI）の収集基盤整備と病理支援システム開発」がキックオフされAIを活用し病理医

不足や診断精度向上を目指すとしています。

病理の領域では以前から遠隔病理診断（テレパソロジー）がすでに実用化されていますが、連携した施設間でしか病理診断を受けることができませんでした。これからはクラウドを介したネットワークで病理医不在の複数施設がWSIを作成・送信することで、拠点施設で迅速病理診断や病理診断（組織診、細胞診）を行える時代がくるでしょう。事実、これに追随するように日本臨床衛生検査技師会では2018年2月に先駆的臨床検査技術研修会と題して“WSI実技講習会”を開催し、病理に携わる技師の育成に取り組み始めています。画像診断においては、地域医療連携支援システムを用いて在宅で簡易型超音波画像をリアルタイムに見ながら診断することが可能となり、教育の面では症例経験の少ない施設での医師教育に応用する研究なども進められています。このように診療を行う上でICTは重要な位置を占めると推測されます。

本誌、加藤編集委員長の編集余滴（医療2018；72：40）でも述べているように、医療や臨床検査の領域にも例外なくAIやICTの波が押し寄せて来るでしょう。また、惑星直列も目前に迫っています。そこで、われわれはこれらとどう向き合っていけばいいのでしょうか。進化論を唱えたダーウィンは「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びる訳でもない。唯一生き残るのは、変化できる者である」という考えを示したと言われていました。その解釈には諸説ありますが、ビジネス界ではよく引用されている名言ともいえます。われわれ医療界も環境の変化に適応していくことで、また新たな歴史の1ページが開かれるものと信じています。